

車の前方に、登校途中の麻美の後ろ姿が見えた。

平尾は、歩くたびに男の視線を誘うように揺れる紺色のスカートに包まれた麻美の尻を見詰める。あとほんの少し肉付きが良ければ完璧な尻だ……。まあ、あと2、3年もすれば……。

その思いが、昨夜の記憶を呼び起こし、脳裏に彼女の鮮明な痴態が過ぎった。

縛りつけ、無理矢理に開かせた白く細い裸体。淡い陰毛の陰りの奥の、桜色をした肉襞。ねじ込まれたバイブレーターによって膣穴から滲みだした破瓜の血。糸で縫われた陰唇。尻肉の狭間のくすんだ色をした肛門。風呂場で見た恥辱の姿。きつく陰茎を締めつけてきた肛門の味わいと尻肉の弾力。車の中で自らの手でバイブレーターを挿入させた時の表情。そして、彼女があげ続けた悲鳴とすすり泣きと、そして快樂の喘ぎの声――

平尾は車の速度を落とし、彼女の横に車を着ける。

振り返りつた麻美が、車の窓から自分を見詰める平尾に気づき、一瞬、表情が強ばった。

「おはよう、麻美」

平尾が淫らな想像を奥に隠した微笑みを浮かべ、話しかける。

「おはようございます……」

視線を逸らした、彼女が答える。

平尾が辺りに視線を走らせ、彼女と自分の会話が聞える範囲には誰もいない事をすばやく確かめる。

「言い付けは守っているだろうな」

「言い付け?……」

「もう一度、きつく躰なけれりゃ解らないらしいな……。昨日の夜、お前にやったバイブだよ、ちゃんと入れてきているだろうな」

麻美が息を飲む。確かにその事は承知していた。実際に朝のシャワーを浴びた風呂場の中で挿入を試みさえた、しかし淫らな器具を膣に挿入したまま登校するなどと言った事にはさすがに強い抵抗があり、結局彼女はその言い付けを守れなかったのだ。今、その肛門用の陰具は、鞆の一番奥に幾重ものテッシュにくるまれて密かにしまわれていた。

彼女の表情を読んだ平尾が、鋭い視線を向け、その彼の目付きに麻美が身体を縮める。

「……すいません。でも、でも、どうしても駄目だったの……。あんな物を入れたままでなんて

……」

平尾が、そんな彼女の表情を楽しむように、ゆっくりと煙草を取り出し、火を点ける。煙を唇の端から吐き出し、そして彼女に目を向けること無く言った。

「1時間目が終わったら……」

「え？」

突然の言葉に、麻美が聞き返す。

「1時間目が終わったら、保健室に行くんだ。仮病でも使えばいい、そこで美佐子にお前のあそこを見せるんだ、バイブを咥えこんでいるお前のあそこをな。もしその時、まだ入れてなかったら、今夜もう一度縫ってやる、バイブを突っ込んだままな……」

麻美が、昨夜の性器を縫われた時の痛みを思い出す。そしてその後の快楽も同時に。

心なしか顔色を青ざめさせた彼女に、からかうような口調で彼が囁く。

「もつとも、あれが気に入ったなら、別にいいんだぜ」

「……」

言葉をなくした彼女に、平尾が冷たく笑いかけ、車のアクセルを踏む。

車の後には、自分の呪うべき運命を自覚して立ちすくむ麻美と、微かな煙草の煙が残された。

*

授業の合間の休み時間は、わずかに十分間だった。その短い時間の内に、いつ級友が入ってくるかも知れないトイレで、自分の膣穴にバイブレーターを埋め込む事は、不可能ではないにしろ、避けたい事であった。

しかし、登校してすぐに向かったトイレの個室の中で、麻美は早くもその考えに後悔を覚えていた。

昨夜針で縫われた性器の肉襞の傷は赤く腫れており、陰具を挿入する事によって、疼くような痛みを覚えた。だが、バイブレーターの挿入によって感じるのが、その苦痛だけならば充分に耐える事が出来た、しかし、その向こうには鈍い快感が潜んでいた。

内側に、小さな経血の染みが出来ているナプキンを、テープで止めた下着をずり上げた時、その快感を助長するように膣の中の陰具が動いた。彼女は一瞬動きを止め、慎重に身体を起こす。

個室のドアを開けて外に歩みだしたとき、太股に張つけたバイブレーターのコントロールボックスを止めたテープの感触が不快だった。

教室までの短い廊下を歩く時にも、足の動きに一拍遅れて膣の中の陰具が蠢いた。

確かにその感触は異様なものであったが、麻美は性器の表面に経血ではない、熱いぬめりが生じはじめた事も又、自覚していた。

彼女は、自分を落着かそうと廊下の窓の近くに立ち止まり、何気ないふりを装うように、目を外に向ける。始業時間が真近なのを知っている生徒達が、足早に校門に駆け込んでくる姿が見えた。

朝日の中に浮ぶ校舎とグラウンド、そして生徒達。その光景はごくありふれたものであったが故に、彼女をいつそう苦しめた。

始業五分前を告げる、予鈴のチャイムが鳴った。

「おはよう、美樹崎」

教室に入った麻美に、級友、広瀬 薫が明るく挨拶して来る。

「ああ、広瀬、おはよう」

挨拶を返した彼女に、薫の表情が曇った。

「どうしたの、顔、赤いわよ」声が小声になる。

「生理、重いのか……」

「……う、うん……、ちよつとね……」

「あんまり無理することないのよ、美樹崎、成績良いんだから、少しぐらいサボっても平気なんだから……」

「うん、ありがとう……」

心配そうな薫の視線を尻目に、麻美は自分の席へと向かう。

椅子に座った途端、膣の奥にバイブレーターが深く押し込まれ、思わず低い声が漏れた。

その声を噛んだ唇の間で押さえる彼女の小鼻からは、決して苦痛だけではない小さな息が漏れた。

1時間目の現国の教師が教室に現れ、いつもどおりの授業がはじまる。

だが彼女は、教師の講義の声にも、黒板に書かれた有名な詩人の詩にも、まったく集中する事が出来なかった。尻を動かすたびに内股の奥で、柔らかい膣肉を押し分けるように蠢く陰具の感触と、そこから滲みだしてくるように生じる快感、そして、その快感を押えるどころか助長する、肉壁の疼くような痛み。したたる熱いぬめりの感触。

麻美は白紙のままのノートの上に止めたままでもいいこうに動こうとはしないシャープペンシルを強く握り締める。

彼女は、今生理であった事に、微かな安堵を覚えていた。もしナプキンを着けていなかったらパンティには淫らな染みが出来ていただろう、そして、もしかしたらその滲みは、椅子にまで染み通ったかもしれない……。

彼女が、意識しないうちに腰を動かし、陰具を埋めた性器をリズムカルに椅子に押しつけはじめる。股間からの快感が、水面に生じた波紋のように全身に広がっていく。

鈍い快感に、その鈍すぎる快感に、何度も授業を中座したいと教師に申し出ようと手を上げか

けた彼女であったが、その都度勇気が萎え、手を止める。しかし、遂に限度がやってこようとしていた。

ダメ……、もうダメ……。もうこれ以上我慢できない。

火照るほどに欲情し、膣穴から滲み出す愛液にまみれ、ナプキンとの狭間でぬめっているだろう秘肉。黒いゴム製の陰具を深くくわえ込み、もっと強い刺激を渴望し淫らに蠢いているだろう膣穴。

そこを思いっきりかき回し、くわえ込んでいる陰具で思いっきり擦りあげたい。

もうダメ……。このままじゃ、おかしくなってしまう……。

だが、彼女が震えがちな手を上げようとした時、終業のチャイムが教室に鳴り響いた。思わず安堵の溜め息が漏れた。

「広瀬、わたし、保健室にいくわ……。悪いけど次の授業の先生に言っといてくれない」
授業の後のざわついた教室で、麻美が薫に言った。

微かに息が乱れている。

「うん。それはいいけど、凄く顔が赤いわよ、熱でもあるんじゃないの？」

「少し気分が悪いの……」——「じゃ、お願いね……」
踵を返した麻美が教室を歩み出る。美佐子が待ち受けているだろう保健室に向かって。

*

保健室のドアを開けると、そこには白衣を着けた美佐子が事務机に向かっていた。ほっとした事に、保健室には他に人影はなく、彼女一人がいるだけであった。

ドアの開く音に、美佐子が入口に佇む麻美に振り向く。彼女を認めた途端、生真面目だった顔が淫らさを含んだ微笑みに変化する。

「どうしたの、美樹崎さん。気分でも悪いの？」

その声にはハッキリとからかう調子があった。

麻美が背後のドアを閉じ、うなだれる。

「平尾先生に……お聞きになつていないのですか？……」

美佐子が座っている回転椅子を回し、麻美に向き直る。

「平尾先生？ ああ、そう言えば……、この女生徒で性器の中にイヤらしい道具を入れて授業中に淫らな事を楽しんでいる子がいるって聞いたけど、あなたなの？ 美樹崎さん……」

美佐子の言葉の語尾は含み笑いに掠れて消えた。

「そんな……、楽しんでるなんて……」

麻美が顔を上げる。

美佐子の声の調子に変化する。

「違うのかい？ 麻美」

麻美が再びうなだれ、股間の濡れた感触を意識する。

美佐子が立ち上がり、麻美に命じる。

「ベッドに行きなさい、お前が授業の間、一人でどれだけ楽しんだか確かめてあげるわ……」

麻美が、部屋とはカーテンで仕切られているベッドに向かう。

カーテンの向こうには、清潔な白いシートに包まれたベッドが2つ並べられていた。

ベッドの横の窓には、目隠しの為のブラインドがあり、そのわずかな隙間から、まだ朝日の雰囲気がある太陽の光が差し込んでいた。

麻美は窓から離れた方のベッドに腰を下ろす。尻の下でマットが柔らかく歪み、再び膣の中の陰具が蠢いた。

漏れそうになる声をかみ殺したとき、美佐子が現れた。彼女は手に一本のガラス棒を持っており、麻美を見下ろしながらその棒を、白衣の胸ポケットに収めた。

「なにをぐずぐずしているの、早く脱ぐの。お前のイヤらしい下半身を剥き出しにするのよ」

美佐子に命じられた麻美がベッドから立ち上がり、ためらい、そして美佐子を見上げてそれが無駄な事だと悟る。

彼女がスカートに手をかけた時、二時間目の始業のチャイムが鳴った。

紺色のスカートが床にうずくまり、その上で麻美が、内側のナプキンによって股間がわずかな盛り上がりを見せている白いパンティに手をかけ、思い切ったようにずり下げる。

途端に、清潔なベットシーツの匂いの中に、雌の匂いが混ざり込んだ。

美佐子が欲情の微笑みを浮かべながら、麻美の股間を見下ろす。

「うふふつ……、そのベトベトに濡れているのは汗なのかしら？」

「……」

「汗なの？ 麻美」

「……違います」

「じゃ、何なの。その歳になってオシッコでも漏らしたのかい、お前？」

「……ぬ、濡らして……」

「え？ 聞こえないわ」

「濡らしてしまいました……」

「くわえ込んでいる道具がそんなに気持ちよかったのかい？」

「……はい……」

「淫乱だねえ、まるで」

「……」

「さあ、ベッドに上がって脚を大きく開くの、お前が汚らしく濡らしたところがよく見えるようにね」

麻美がベッドに上る。

彼女は糊の効いたベットシートの上に、上半身に制服を着けたままの身体を横たえ、膝を立てるようにして下肢を開く。膣穴に埋まったバイブレータから伸びたコードが引かれ、コントロールボックスを張つけた太股に引きつるような痛みが走る。

彼女の開かれた股間の中心では、埋まった陰具の為に微かに膨らみ、2枚の肉襞が開き気味になった性器が見え、その上の緩やかなカーブを描く肉の丘には、薄い陰毛が愛液によって、乱れ、べっとり張り付いていた。

美佐子がベッドに手をつき、そんな彼女の股間を覗き込み、赤らみ背けた顔を見詰める。

「凄く濡れているわよ……」

美佐子が昂ぶった声で囁き、そして、横を向いている麻美の頬に手を触れる。

「こつちを向くの……」

麻美が恐々に美佐子の顔を見た途端、彼女が麻美の唇に自分の唇を合した。驚き、逃げようとするその後頭部を彼女が押さえつけ、麻美の唇を舌で割っていく。

差し込まれた舌のヌメヌメとした感触と、身体にのしかかってくる美佐子の身体の重さ、着けている微かだがキツイコロンの匂い。麻美が目を閉じる。

美佐子が彼女の太股に手を伸ばし、そこに張り付けられているコントロールボックスのスイッチを手探りで入れた。

「あっ！」

火照り切った秘肉を騷るかのように蠢きだした陰具に、麻美が声を上げ、微かな歯磨き粉の芳香が残る息を、重ねた美佐子の唇の中に吹き込む。

くぐもったモーターの音が響くなか、美佐子が、喉の奥から快樂の喘ぎと息を漏らしつつける麻美の唇を楽しみながら、その表面を舐め回す。

麻美は固く瞳を閉じ、自分でも意識しないうちに動きだそうとする下肢を押えつけ、膣の中で鎌首を振り、細かく振動する陰具の生み出す快樂を貪る。1時間近くも耐え続けてきた欲望のくすぶりはすぐに炎となり、膣穴から流れ出した愛液が、ベッドの白いシートに薄い染みをつくっていく。

麻美の吐く息が絶頂まじかの切羽詰ったものとなり、喘ぎの声が大きく変化しだした時、麻美からわずかに離れた美佐子が囁く。

「生んで見せなさい……」

麻美の熱い息を吐きつづける唇が、微かに動く。

「え？」

「お前の中に入っている道具を生むの……、お尻の穴を引き絞るようにしてごらん、出て来るわ……」

美佐子が麻美から身体を離す。

美佐子の視野の中で、麻美の性器が蠢き、その下の肛門がきゅと窄まる。異様な程の昂ぶりに憑かれたような表情を浮べた麻美の表情に、いきむような表情が重なり、眉が顰められる。

麻美の、愛液にまみれ短い糸を絡み付かせている膣穴から黒い陰具の下部がじわりと現れる。

「もつと、もつと締めるのよ……」

美佐子が、麻美の蠢く股間を食い入るように見詰る。

肉壁が、愛液のぬめりに粘りつくように押し分けられ、陰具が三センチ程膣穴から抜け出してくる。

押さえられていた秘肉の抵抗がすくなくなった為に、モーターの音が大きくなり、性器の表面に振動を感じた麻美が喘ぐ。

「あぁっ……！」

荒い息が、半開きとなった唇から漏れ、眉が顰められる。

「ダメ……、もうダメ、許して……」

「ふん、情けないわねえ、そんな事も出来ないようじゃ、ずっとお尻にしか入れてもらえないわよ」

美佐子が淫らに微笑みながら、麻美の太股に張ついたコントロールボックスを剥がし取り、そのまま、陰具の尻から伸びるコードを引っ張りはじめ。

愛液にまみれた陰具が、振動し、首を振りながら膣から抜け落ちると、そのぬるりとした感触に、麻美が大きく声を上げた。

その陰具のコードを持った美佐子が、くねり続けるそれを麻美の目前に見せ付けるようにぶら下げる。

「ほら、よくご覧なさい麻美、湯気が立つほど暖まっているし、表面にこびりついているこの白いものは何かしらね？」

「イヤッ」

目を背ける麻美の頬をつかんだ美佐子が、陰具を更に近づける。

「それにほら、とってもイヤらしい匂いもしているわよ」

「うう……」

「ふふふっ……」

美佐子が今にも泣き出しそうな彼女を見詰めながら、ぶら下げた陰具を自分の鼻先に近づけた。唇が割れ、そこから伸びた舌尖が黒いゴムの表面を舐める。

「お前の味がするわ……。欲情した女の味……」

そんな彼女を信じられないように見詰める麻美の瞳の奥に、鈍い光が宿りはじめ、ため息にも似た小声が漏れだした。

「ああ……」

美佐子が陰具をベッドの上に投げ出し、麻美を引き寄せて再びその唇を奪う。

女同士の淫らな口付けを貪り合う二人の横では、陰具がくねりながら、その表面にまとわりつかせた白濁した愛液を、白いシーツに擦りつけていた。

麻美から顔を離れた美佐子が、胸のポケットからガラス棒を抜き取る。

「脚を開きなさい。今度はこれで楽しませてあげるわ」

どこか惚けたような表情を浮かべる麻美は、逆らおうともせずベッドの上で脚を開きはじめる。

「そうよ、そうやって素直にしていれば、楽しませてあげる」

「はい……」

「うふふっ……」

愛液に塗れ、陰毛の張つく肉襞に、美佐子が持つガラス棒の先端が触れると、丸くなった透明な棒の先端に粘液が付着し、鈍く光った。

彼女はガラス棒で麻美の2つ肉襞を左右にめくり上げ、その内側の桜色をした箇所を剥き出しにしていく。

「オナニーはどれぐらいするの？……」

「……週に一度か、二度……ぐらい……」

ガラス棒の先端が、すっかり膨れ上がっている陰核の尖りに触れ、弾き上げる。

「ああっ！」

「どう、自分でするより気持ち良いでしょう？」

「は……い……」

ガラス棒が、またしても新しいしたたりを滲ませている肉襞の上をすべり、その狭間に隠された尿道口の小さな窄まりに触れた。

「ここ、触った事ある？」

「ありません……」

尿道に、ほんのわずかだけガラス棒が挿入されると、その奇異な感触に麻美が腰をピクリと震

わせた。

「あっ……」

「ここに馴染めると、どんな感じ？」

「……お、おしっこが出そうな……」

美佐子が麻美の尿道に挿入したガラス棒を手中で回しはじめと、濡れたガラス棒が細い管の内部を擦る感触に、麻美が顔をしかめる。

美佐子が更に深くガラス棒を進めた。

「うっ……」

引きつるような痛み思わず唇を噛んだ麻美の、尿道に埋ったガラス棒を伝って膀胱から薄く色付いた液体が流れ出してきた。それは美佐子の手に触れる途中でベッドにしたたり落ち、白いシートに薄く黄色い染みを作っていく。

「イヤっ……」

麻美が、漏らしてしまった尿の染みに顔を赤らめる。

「フフ……、このベッドにお漏らしをした娘はお前が初めてよ……」

美佐子が薄く笑い、そしてその表情が唐突に変化する。

「始末しなさいよ、自分でね」

美佐子が麻美の髪の毛をつかみ、その顔をシーツの染みに押し付ける。

「イヤア！」

麻美は自分が漏らしたとはいえ、その尿の異様な臭いと、唇に押し付けられた冷たい感触に激しく抵抗するが、美佐子が体重をかけ、彼女の顔をベッドに押し付ける。

「ちゃんと綺麗にするんだよ」

聞えはじめた苦しげなすすり泣声に、美佐子は淫らかな微笑を浮かべていた。

以下、次回へ